

クリュストモスのエウドキア（神の喜び）理解

— 影響作用史的聖書解釈の試み —

武 藤 慎 一

序論

（一）神の感情の問題

神は一体、人間と同様に喜怒哀楽を持つのだろうか。宗教が人間の事柄と深く結びついているものならば、その身体や感情面にも深く関わって然るべきであろう。それにもかかわらず、西洋のキリスト教はその長い歴史の中で、精神に対する身体、理性に対する感情に関する事柄を低く見てきた。その影響は現在でも残っている。なかんずく「正統派」キリスト教では、身体を持った存在である人間のような感情表現を神自身に対して適用することは、擬人論としてタブー視されてきた。このような傾向はいつから始まったのだろうか。

周知の通り、北森嘉蔵がつとに身体と密接に関連した表現「神の痛み」の意義を再発見したように、聖書では神に対して「苦しみ」、「悲しみ」、「怒り」といった感情表現が多数用いられている。これは旧約だけではなく、新約にも妥当する。しかし、原始キリスト教までは見られたこの現象は、次の古代教会の時代には急速に影が薄くなってしまう

た。それは「単なる」比喩的表現に過ぎないとされ、その感覺的表現によって示された精神的意味だけが重んじられるようになっていった。ノルウェーの宗教史家ギルフス (I. S. Gilhus) が彼女の著書『笑う神々、泣く処女』の中で正しくも洞察しているように、この傾向は特に「喜び」やその表現である「笑い」に関して、より顕著に見られた。¹⁾ この「喜び」の意味を表すギリシア語の一つに「エウドキア」(εὐδοκία) がある。

(二) アンティオキア学派のキリスト論の問題

しかし、これはキリスト教世界全体に等しく妥当するのだろうか。実際には、このような全体の傾向の中で、新約時代からだいぶ時を経た四世紀になっても、シリアでは一部例外も見られた。アレクサンドリア学派と並んで古代キリスト教思想を代表する、アンティオキア積義学派である。特筆すべきは、このアンティオキア学派におけるエウドキアの高い位置づけである。²⁾ その最大の思想家はモプスエステアのテオドロスだが、彼は後に弟子のネストリオスによって有名になる両性論的キリスト論を持つていた。キリストにおける神性と人性の結合の原因という極めて重要な要素として、この「神の喜び」が考えられていたのである。これはアンティオキア的キリスト論の「アキレス踵」とも言うべき、どうしても説明を要する重要な点である。しかし実際は、言わばキリスト論の術語として「エウドキアに従って」(κατ'εὐδοκίαν) という表現が繰り返されるだけで、テオドロスによるこの概念自体の説明は少ない。

そもそも、アンティオキア学派におけるエウドキアを主題として研究したものはこれまでなかった。最近になってようやく、感情や笑い一般に関しての研究は急増してきたが、聖書や宗教史の領域に概ね限られ、アンティオキア学派は殆ど扱われていない。例外としては、マックラウド (J. G. McLeod) による最近の二つのモノグラフが挙げられ

る。まずは、『アンティオキアの伝統における神の像』⁽⁵⁾である。そのアンティオキア学派における人間の身体の尊重の指摘は卓見だが、感情や「神の喜び」については詳しく論じていない。⁽⁶⁾その点、最新の『救済におけるキリストの人性の役割——モプスエスティアのテオドロスの洞察——』⁽⁷⁾は、第七章で「神の喜び」を最も詳細に論じている。しかし、確かに「よき喜びの内住」という語句は繰り返されるが、その中身は殆どが「内住」を詳述するだけで、肝心の「神の喜び」の何たるかは、関心の外に置かれたままである。しかも、その後半ではその語句の言及さえも殆どなくなる。

こういうわけで、その重要性にもかかわらず、アンティオキア学派における「喜び」を主題とした研究はなかった。もちろん、若干触れている研究はあるが、その場合でも「エウドキア」の神学的意味の説明に終始していて、その全体の理解には及んでいない。⁽⁸⁾これでは、この思想の由来が解明されなければかりか、テオドロスの語彙の十分な理解にも到達したことになる。これはシリア地域全体を特徴づける考え方のだろうか。それとも、テオドロスの独創なのだろうか。また、どのような経緯でこの語を採用したのか。こういった重要な問題が未解決のまま残っているのである。

(三) 「エウドキア」の語義の問題

それでは、この「エウドキア」とは詳細には、一体どのような意味のギリシア語なのだろうか。名詞の *eudokia* は、動詞の *eudokein* に由来する。これは語の構成上は、「よく」(*eus*)と「思われる」(*dokein*) から成り立っている。両方共、訳にくい言葉だが、現代の聖書学では名詞が「喜び」、「気に入っていること」、「善意」、「願い」、「満足」、「賛

成」等、動詞が「喜ぶ」、「よいと思う」、「気に入る」、「決める」、「好む」、「意に適う」、「満足する」等、という多様な意味で解されている。⁽⁹⁾ もちろん、「喜び」を意味するギリシア語は、*hēdēkeia* (喜ばせること)や *euaietētos* (満足させること)、*chara* (喜び)等、他にもある。従って本研究では、これらと訳し分ける必要上、*hēdēkeia* を「好しとする(ところ)」「と直訳することにする」。

さて、「エウドキア」はその語用史において、他の類義語とは際立って異なる特徴を有する。まず特筆しなければならぬのは、この語が用いられるのがユダヤ・キリスト教関係の著作にほぼ限定されることである。これは七十人訳による動詞 *euōkēiv* からの新造語なのである。次に、この語は人間についても使用されるが、第一義的には神について使用されることである。⁽¹⁰⁾ 従ってこの一般的ではない語が、聖書では重要な役割を果たしている。まず旧約では、七十人訳で多用され、名詞で二五回、動詞では約六〇回登場する。新約ではその三分の一余りで、名詞で九回、動詞では二一回だが、神学的に重要な場面でも用いられている。最後に、聖書の時代以降の影響作用史も特徴的である。この語は新約以降、殆ど使用されなくなる。しかし、四世紀から五世紀にかけて再び重要な役割を果たした。その最大のものがアンテオキア学派の術語としての「エウドキア」だが、これが一般的なギリシア語でなかった以上、聖書の語彙に由来することは確実である。

ということとは、キッテル編『新約聖書神学辞典』のような新約の時代以前のギリシア語一般における語義を重視する研究方法では、自ずと限界が見えてしまうことになる。⁽¹¹⁾ 七十人訳等のユダヤ教文書以外には、殆ど用例がないからである。このような場合、特にその直後の時代の、しかもギリシア語を話すキリスト教徒たちの証言が通常以上に重要性を増す。古代ギリシア教会の釈義家たちには、現存しない口承及び文書資料があった上、少なくともキッテルら

がこの場合に使用し得た、殆どのギリシア語資料も参照したことになるからだ。難しいのは、聖書の「エウドキア」の意味を知るために彼らの理解を参照するわけだが、その理解も聖書の語用に影響されている点であろう。しかしこの点は、¹²ΕΥΔΟΧΙΑ 新約聖書註解に代表されるような影響作用史的聖書解釈の視点から見れば、全く問題がない。それどころか、歴史と共に開示される聖書の意味理解の一環として、より一層の貢献をその影響作用に期待できるのである。

一 クリュソストモスとエウドキア

(一) 影響作用史上のクリュソストモスの位置

アンテイオキア学派におけるエウドキア思想を明らかにするためには、まずその前提となる「エウドキア」の一般的語義を研究し、ギリシア語としての語用、特に神に関連しての用法を明らかにしなければならない。アンテイオキア釈義学派の代表者は四人いるが、どこから手を付けるべきだろうか。まずは、モプスエスティアのテオドロスだが、後にネストリオス主義の異端と断罪されたために、残念ながらその著作の殆どがギリシア語原典では失われてしまった。従って、エウドキア理解の全体像を解明するには、十分な資料を提供することができない。この点、同時代の著述家でギリシア教父中最大の著作が現存するヨアンネス・クリュソストモスの場合は、全く問題ない。語義研究に必要となる十分な用例が見出される。この二人の共通の師タルソスのディオドロスの著作も重要だが、テオドロスと同じ理由で特にギリシア語原典ではわずかしかなかった。最後に、キュロスのテオドレトスはエウドキアに比較的多く言及しているが、時代が下っている上に、ネストリオスが断罪されたキリスト論論争の影響を受けているので、

神学的術語化する前の一般的な「エウドキア」の語義理解にはふさわしくない。

アンティオキア学派の術語としての「エウドキア」も聖書の語彙に由来することは確かだが、語句が同一の場合、その語句によって表現されている意味内容を彼らがどう理解していたのか、が問題になる。その点クリュストモスの場合、アンティオキアの学統に属するものの、キリスト論の術語としての「エウドキア」は使用していない。彼の用例は殆どが聖書講解文書中にあり、聖書の説明と関連するものばかりである。それで、神学的表現として特殊化する前の、テオドロスと同時代の「エウドキア」という語自体の一般的理解を知るには、かえって好都合である。聖書の用語「エウドキア」とアンティオキア学派の神学的術語としてのそれとの接点を結ぶのが、クリュストモスなのである。そこで本研究では、彼のエウドキア理解を取り上げる。

さて、この「エウドキア」はクリュストモスでは術語として使用されなかつたので、キリスト論研究を始めとする彼の思想研究では、扱われていない¹⁶。最近関心が高まっている釈義研究でも、まだ殆ど触れられていない。最後に、比較的多数の研究が行われている生活関連の領域だが、『劇場の見世物と修道的生活』というモノグラフが「喜び」(pleasie)にもしばしば言及している¹⁸。だが、これは専ら肉欲的「喜び」(快樂)を扱っているだけで、「エウドキア」には触れていない。つまり、従来のクリュストモス研究のどの領域においても、彼のエウドキア理解はその直接的対象から外れてきた。その影響作用史上重要な位置を占める、クリュストモスのエウドキア理解を捉える試みは、皆無である。本研究は、その研究史上の欠けを補おうとする初の試みである。

(二) クリュソストモスの著作におけるエウドキア

クリュソストモスの真正な著作における εὐδοκία、εὐδοκείν の用例は百例近くに上るが、その大多数は聖書の引用に過ぎない。そのうち旧約の引用は、創世記からも若干あるが、殆どは詩編からのものである。新約では、福音書からも引用されているが、パウロ書簡からのものが多い。⁽²⁰⁾

次に引用の仕方だが、大部分の用例は説明等一切なしに、聖書本文をそのまま引用するだけである。この事實は、七十人訳や新約が書かれた当時のユダヤ・キリスト教のギリシア語では、この語が普通に用いられていたとしても、クリュソストモスの時代には一般には使用されなくなっていたことを意味している。更に、それでも教会のギリシア人にとって、説明なしに引用するだけで大体分かるような範圍の語彙だったことも意味する。ただ、当時のギリシア語では、「喜び」という意味を新たに表現するのに、この「エウドキア」をもはや使用していなかっただけである。それで、聖書中の「エウドキア」を断りもなしに、当時の一般のギリシア語に言い換える場合もある。⁽²¹⁾

しかし、我々にとって重要なのは、語句の組み合わせが一風変わっていたり、当該聖書テキストの内容が注釈を要するような場合、クリュソストモスは時として聖書の引用だけではなく、それに自らの説明を付していることである。⁽²²⁾ この場合、彼の理解が分かる。そこで、本研究ではその貴重な個所を詳しく分析してみることにする。なお、以下での聖書本文からの引用は、彼が引用したものから直接訳したので、もちろん現在の校訂版テキストとは若干異なる。⁽²³⁾

最後に、聖書テキストとは無関係の全くの地の文での言及は、ただ一度きりである。ただ、それは神学的に重要な言明での用例である。そこでは、説明なしに使用されているので、その個所だけで意味を確定させることはできない。従って、以下でクリュソストモスによる聖書理解を十分に考察した上で、この神学的理解を検討することにする。

二 聖書のエウドキアの語義理解

(一)「願望」の意味での用例

クリュソストモスのエウドキア理解においては、「願望」関連の意味と「喜悅」関連の意味との二つに大別できる。まず、「願望」関連の意味での用例から検討しよう。彼はIIコリント五・八を講解する中で、パウロの「私たちは好しとしている」をあたかも当然のように、「私たちは切望している」と言い換えている。説明もなしに、ただ即座に言い換えているところを見ると、クリュソストモスにとっては、こちらの方がむしろ、この場合の自然な表現なのである。その証拠に、その後も一人称のまま、つまりパウロらになりきって、「私たちは何を切望しているのか」と続けている。エウドキアの説明の中で最も多いのが、この「切望」という意味で受け取る場合である。「切望する」(ἐπιθυμῶ)は、「望む」(ἐπιθυμῶ)や「願う」(βούλομαι)等、願望の意味を表す一般的な表現と比べて、より程度の強い願望を表す語である。これは動詞の例だったが、名詞(ἐπιθυμία)の場合も同様で「切望」、「熱望」、「渴望」、「欲望」という意味である。

同じくパウロの言葉から用例を挙げると、『ローマ書講話』の第一七講話の冒頭で、ローマ一〇・一が引用されている。ここでは、パウロの心の「好しとするところ」が彼の「祈願」と併置されている。その願望の内容は、ユダヤ人の救済である。クリュソストモスは、これに「彼(パウロ)はここで、強い切望のことを『好しとするところ』と述べている」と説明を加える。この「切望」単独でも、通常よりも強い願望を表すものだったので、クリュソストモスは「エウドキア」をそれより更に強い願望と理解していたことになる。

この「強い願望」としてのエウドキアとは、具体的にはどのような意味なのだろうか。他の願望とはどういう関係にあるのだろうか。これについてクリュソストモスは、エフェソ一・五を次のように詳細に説明している。

「彼(パウロ)は『彼(神)の意志の好しとされるところに従つて (κατὰ τὴν εὐδοκίαν)』と述べている。これは、『強く望んだが故に』ということである。それ(好しとされるところ)は、言うなれば、彼の切望である。実際、至るところで、優先的な意志が『好しとされるところ』なのである。実際、罪を犯してしまった者たちが滅びないことが第一の意志、悪くなっている者たちが滅びることが第二の意志、といった具合に、別の意志もある」。これは、神の「切望」を論じる重要テキストである。しかも、「至るところで」と述べているので、ここで説明されていることが特殊なことではなく、普遍妥当的な原則だと認識されていることが分かる。その内容は、聖書では一般に神の願望が複数ある場合、そのうち強い方、主たる方が「エウドキア」だ、ということである。このことをクリュソストモスは、罪人の裁きを例にとつて説明している。

彼は続けて、パウロ自身の意志にもこれを適用している。それによると、人々が独身に留まることがパウロの第一の願望で、結婚して子供を産むことが第二の願望である。クリュソストモスは更に、口語的表現を含む様々な表現を試みる。

「従つて彼は、第一の意志、強い意志、切望を伴つた意志、確信 (βεβαιότης) のことを『好しとされるところ』と述べている。実際私は、より単純な人々にとつての明瞭性のために、より一般的な言葉を使うことも辞すまい。実際、このように私たちも意志の強烈さを示して、『私たちの確信に従つて』と言う」。

神の第一の意志の、ここでの具体的な内容は何だろうか。クリュソストモスは次のように結論する。

「従つて、彼（パウロ）が言っていることは、次のことである。『彼（神）は私たちの救いを強く所望され、強く切望されている』と。それでは彼は、何のためにこのように私たちを愛されるのか。また、どこから彼はこのように親しくして下さるのか。ただ善性から、である。実際、恵みは善性によるものである」。

つまり、クリュストモスによると、神は人間を愛するが故に、人間の救済を切望したのである。

また、このエフェソ一・五の少し後にも再度、「彼（神）の好しとされる場所に従つて」（エフェソ一・九）が登場するが、その解釈でもクリュストモスは同様に、神は「切望されていた」と理解している。²⁹ 以上のことから、クリュストモスが「願望」の意味でエウドキアを理解する場合、主に何らかの事柄の「切望」という強い意味で解していた、と言える。

（二）「喜悦」の意味での用例

クリュストモスのエウドキア理解では、右で考察してきた強い「願望」の意味の他に、「喜悦」の意味で受け取っている場合が多い。それは例えば、有名なキリストの降臨の個所で、羊飼いたちへの天使の言葉（ルカ二・一四）の解釈が挙げられる。神が万物との御子による和解を「好しとした」（コロサイ一・一九―二〇）ことを説明するくだりで、彼はルカ伝を引用する。

「地のものを天が受け取ろうとしていたので、地が天になった。これ故、私たちは感謝しつつ、『栄光がいと高きところで神に、そして地には平和が、人間には好しとされるところがある』³⁰と言う。彼（ルカ）は、『見よ。人間も以後、『神を』満足させている（εὐαρετοῦντες）ように見えた』と述べている。『好しとされるところ』は

何か。和解だ。もはや天には、隔ての壁がない⁽⁵⁶⁾。

クリュソストモスによると、ここでは人間が神に喜んでもらうことに関して、「好しとするところ」が使用されている。この「満悦させる」は、強い喜びを表す語である。

次は、神を主語とする用例である。それは、キリストの変容の際の御父の言葉「これは愛するわが子で、私が好しとした者である。彼に聞きなさい」(マタイ一七・五)である。クリュソストモスは、御父と御子との関係を論じながらこの言葉を詳細に説明する中で、「だが、『私が好しとした者』とは何か。あたかも彼が、『私が休らう(εὐραδοναί)者、私が喜ぶ者』と言っておられたようなものだ⁽⁵⁷⁾と語る。ここでの「好しとする」は、「喜ぶ」の意味で解されている。もう一つの「休らう」は少し分かりにくい表現だが、「憩う」、「安らぐ」、「静まる」、「落ち着く」、「満足する」といった意味の語である。喜悦にも種類があるが、エウドキアは休息を伴うような喜びなのである。いずれにせよ彼がこの二つの動詞で、御父の御子に対する格別の安心感、信頼感、満足感を伴った喜悦、つまり満悦を表現していることは、確かである。この前後の文脈で、御父と御子との同等性、一体性が強調されているからである。

しかし、これはエウドキアの説明の仕方として、神限定の特殊なものでもない。全く同一の説明が、人間についても用いられているからである。具体的には、彼は『ヘブライ書講話』の中でIIコリント二・二〇を引用して、「そして彼(パウロ)は『それ故、私は弱さを好しとする』と言う。これは、『私は苦難を喜び、それらに休らう』ということである⁽⁵⁸⁾』と言っている。これでクリュソストモスにおいては、「好しとする」の意味として「喜ぶ」と「休らう」という二つの動詞の組み合わせが考えられていたことが、より確実になった。しかも、その主語は神と人間とを問わない。それにしても、「苦難」が目的語の場合、「喜び、休らう」ということは分かりにくい。クリュソストモスによる

エウドキアの説明の中では、幸いこの個所のものが最多なので、次の(三)で再度これを取り上げてみたい。以上のことから、彼が「喜悦」の意味でエウドキアを理解する場合、主に何らかの対象への「満悦」という強い意味で解していた、と言える。

(三)「願望」と「喜悦」の意味での用例

ここまで、「エウドキア」を「願望」の意味と「喜悦」の意味に大別して、それぞれ単独で用いられている例を考察してきたが、今度はこの二つの意味が併置されている個所を考察してみよう。

まずは、IIテサロニケ一・一一の「そして、私たちの神が善性の好しとされるあらゆることを満たして下さるよう」を解釈して、クリュソストモスは次のように言う。

「彼(パウロ)は『好しとされるあらゆることまで』と述べる。これは、『喜ばせる(まで)』、確信(まで)、全き確証(まで)』ということである。あたかも彼が、『神の確信がなるよう』、『何もあなたがたに欠けているものがないように』、『ちょうど彼が願う通りであるよう』と言っていたようなものだ³⁹。

一方では、この中で二回用いられている「確信」(βεβαιον)はクリュソストモスでも用例が数例しかない語で、しかもそれは全て「エウドキア」の意味を説明するテキストで用いられている。一つ目は誰の「確信」かを明示していないが、二つ目は「神の」と明示している。これは、神の強い意志を表す語である³⁹。また、「全き確証」(ἀντιποσειστα)は「確信」の類義語で、動詞の「願う」も神に関して用いられている。従って彼は、ここでの「好しとされること」が神の願望の意味を表すと考えていた、と言える。他方では、「確信」と並んで「喜ばせること」が用いられている。

誰を「喜ばせる」かは明示されていないが、並列の「確信」の場合を勘案すると、神の喜びのことだと分かる。つまり文脈上は、人間が神に喜ばれることを意味している。従ってクリュソストモスは、人間の目的としての「エウドキア」を神の「願望」の実現と神の「喜悅」の両方の意味で捉えていることになる。

同様の例は、詩編一四五編解釈でも見られる。七十人訳の詩一四四・一六の「好しとするもの」をクリュソストモスは「満悦させるもの」といったん解釈する。⁽⁴⁾しかし、それに続く敷衍的説明では、「喜ばせるもの」という表現と並列して「望むもの」という表現も使用している。その後も「切望」と言い換えられている。つまりここでは、人間にとっての喜悅の対象と願望の対象とが同一のものを指している。

ところで、クリュソストモスはこの詩編一四五編の講解で、少し後の七十人訳の詩一四四・一九を説明する中で、こう語っている。

「それ故、彼(パウロ)は『私は弱さ、苦難、迫害を好しとしている』とも言っていた。だが、もし彼が逆のことを以前は願っていたとすれば、彼は無知の故に願っていたのだ。だが、神がこのことを願っておられることを彼が学んだ時以降、彼自身も好しとしている。実際、神の意志と彼を恐れる者たちのそれとは、別々でない。だがもし、何か(別のこと)を彼らも人間として願っていると、彼らは後で改める」⁽⁴⁾。

ここでクリュソストモスは、神の摂理と人間の自由意志の問題を論じる中で、(二)で問題になっていたIIコリント一・二・一〇を再び引用する。ここでは、喜悅だけの意味で理解されていたのだが、ここでは逆に一貫して願望の意味で説明されている。「好しとする」自体も「願う」の類義語として登場している。パウロは、神の願望を自らの願望とするようになった。それでは、この聖書テクストの意味として、喜悅と願望の一体どちらが「真の」意味だと考えられるようになった。

ていたのだろうか。

これは、クリュソストモスが好んで引用する個所だが、その度に別々の解説を施してきた。しかし、やはり彼は『第二コリント書講話』の当該個所が主役の講解で、最も詳細な説明を行っている。その中で、彼は次のように述べる。

「彼(パウロ)は、危険から解放されることを切望していた。だが彼は、これが起こってはならないことを神から聞いた時、祈りがかなわなかったことで落胆しなかつただけではなく、嬉しくさえなった。それ故、彼は「私は、キリストのために侮辱されること、迫害されること、窮することを好しとし、喜び(*χαίρω*)、切望する」と言っていた⁽⁴²⁾。

クリュソストモスは、パウロの言葉を引用する中で、「好しとする」だけを別の二語「喜ぶ」と「切望する」に直ちに言い換えている。この三語が類義語であることの証拠である。パウロは、最初は切望していなかつた様々な苦難を喜ぶようにさえなった。「好しとする」の説明として、「喜悦」の意味と「願望」の意味とが同時に考えられている。ということ、同じIIコリント一・一〇が、ある個所では「喜悦」だけの意味と説明され、別の個所では「願望」だけの意味で取られていても、実際にはこの両方が並んで考えられていたことになる。いずれか一方だけが「真の」意味ということはないのである。

(四)「願望」と「喜悦」の関係

ところで、この二つの意味には、より厳密にはどのような相互関係があるのだろうか。最後に、エウドキア理解における願望と喜悦の具体的な相互関係を扱っているテキストを考察してみよう。まず、御子の意志としての「エウド

キア」と御父のそれとの関係についての、クリュソストモスの説明が重要である。ここでは、次のように両方に關して言及している。

「その上彼(イエス)は、これらによって御自分の優先的意志も、御父のそれも示される。實際彼は、一方では起こっていることについて感謝され、喜ばれることで御自分の「それも示され」、他方では彼(御父)が請われてこれを行われたのでもなく、彼御自身で内発的になされたことを示されることで、御父の「それも示される」。實際、彼(イエス)は「このようにして、あなた(御父)の御前に好しとされることが起こった」と述べられる。これは、『このようにしてあなたを喜ばせた』ということである」。

このマタイ一・二六は、賢者ではなく幼子への神の奥義の啓示に關する文脈にある。クリュソストモスはこれを「御父を喜ばせた」という意味に解している。この喜びが、啓示が御父の優先的意志だったことの証拠である。また、御子の優先的意志でもあったことを示す方法としても、喜ぶことが挙げられている。ところで、二(一)で見た彼の定義によると、「エウドキア」とは「優先的意志」のことであった⁴⁴。従って、ここでのエウドキアは、神の願望とそれが成就した結果の喜びの両方が意味されている。しかも、このことは御父と御子の両方について妥当する。クリュソストモスのエウドキア理解で、御子の喜びについて触れているのは、この個所だけである。しかし、ここで明らかなように、それは御父の喜びと軌を一にしている。

次に検討する必要があるのは、フィリピ二・一三⁴⁵解釈である。クリュソストモスは、次のように語る。

「彼(パウロ)は、『好しとされることのために』と述べる。これは『愛の故に』、『彼(神)の喜びの故に』、『彼が思っておられることがなるように』、『彼の望み(εσπαρν)に従って「なる」ように』ということである。こ

で彼（パウロ）は、いかなる場合でも彼（神）が働いておられることを示し、勇気づけている。実際彼は、私たちに御自身が願われるように生きることを望んでおられる。だが、もし彼が願われるなら、それに向けて御自身が働いておられるし、それをいかなる場合でも働かれるであろう⁴⁶」。

内容的には、人間に対する神の行為を扱っている。「彼が思っておられることがなるように」と「彼の意志に従って（なる）ように」とはほぼ同義なので、並立する「愛の故に」と「彼の喜び（彼を喜ばせること）の故に」も似たような意味と取るのが自然だろう。つまり、神は彼らを愛して喜ばれるので、彼らのために行為する。また神は、それと同時に彼らに対する自らの意志が実現することを目指している。つまり「好しとされること」で、神の行為の原因としての喜悦とその目的としての願望の両方が意味されている。神は人間が気に入っているので、その人間に対して望むのである。

以上のことから、クリュソストモスのエウドキア理解では、たといいずれか一方の意味が明示されていない場合でも、願望の意味と喜悦の意味が密接に関連している、と言える。ただ、その関係の仕方は個々の場合で異なっている。「目的としていた願望が実現した結果、嬉しいと思う」場合と「喜悦したことが原因となって、それに対して望みを抱く」場合とに大別できる。本研究では、前者を「願望から喜悦へ」、後者を「喜悦から願望へ」とそれぞれ呼ぶことにする。

三 エウドキアの神学的理解

(一) テクストの分析

ここまでは、クリュソストモスの浩瀚な聖書講解文書におけるエウドキアの語義理解を扱ってきた。次に、その神学的理解を考察したい。クリュソストモスには論争的文書もあるが、彼の膨大な著作の割にその数は多くない。しかし、その中に彼の真正な著作中唯一の、地の文でのエウドキアへの言及箇所がある。語句としても、テオドロスの常套句「エウドキアに従って」と同一である。しかもそれは、『アノモイオス派反駁』第九講話の末尾という重要な箇所¹に位置し、内容的にも御子の来臨、つまり受肉についてであり、当然キリスト論とも関連が深い。文脈上は、ヨハネ一・四四でキリストがラザロを巻いていた布を解くよう、ユダヤ人たちに命じた理由を説明する次の言葉である。

「ラザロが彼ら(ユダヤ人たち)によつて埋葬の準備をされた者であり、キリストが御父の好しとされるところに従つて(*kat' eisothian*)世へと来臨しておられる方、生と死の権を持つておられる方、であられることを彼ら⁽⁴⁷⁾がその試みによつて、自分たちが行つた(埋葬の準備をした)ことから学ぶようにと……」。

詳細に分析してみよう。ここでは、キリストが天から世に来臨した方であることが述べられている。その「来臨しておられる」という動詞の現在分詞に対して添えられている副詞句が「御父の好しとされるところに従つて」である。次に、この副詞句の意味に焦点を絞つて分析していこう。ただここでは、説明なしに使用されているので、二で考察したクリュソストモスによる聖書理解を参照して、ここでの意味を検討していくことにしたい。まず、この名詞「好しとされるところ」は「御父」の属格を伴っているが、この類例としてはエフェソ一・九の「彼(神)の好しとされ

るところ」が挙げられる。ここで、「好しとされる」行為の主語が御父であることは、確実である。副詞句としても、このエフェソ一・九と同じく、前置詞 *kata* (……に従つて) を伴つて、「好しとされる」ところに従つて」となっている。これは、その少し前のエフェソ一・五にも用例がある。そこでは、「意志の」が挿入されているが、内容的には非常に近い。二(一)で考察したように、クリュソストモスの講話では、人間の救済に関する御父の強い願望が意味されている、と考えられている。つまり御子の来臨は、御子の独断による勝手な行為ではもちろんなく、御父の意に適っている、ということである。⁽⁴⁸⁾

(二) 神学的意味

同様に、ここでも主に願望の意味で取るとすると、御父が御子に対して世に來臨することを切望し、その切望を実現するために御子が來臨した、ということになる。この場合は、エウドキアは目的の意味になる。ただし、二(四)によると、願望と喜悦の意味は密接に関連していた。従つて、これに喜悦の意味を加味すると、「御子が世に來臨して御父の願望を実現した結果、御父が喜悦した」という意味になる。これは本研究の分類では、「願望から喜悦へ」に当たる。御子の來臨は人間の救済のためであるから、これは二(一)の内容とも一致する。

次に、エウドキアを主に喜悦の意味に取つてみよう。そうすると、御子が御父を満悦させているので、御子が世に來臨した、という意味になる。逆から見ると、御父は御子に満悦しているの、御子を世に遣わし、生と死の權を授けた、となる。この場合のエウドキアは、原因の意味である。ただし、願望と喜悦の意味は密接に関連していた。従つて、これに願望の意味を加味すると、「御父が御子に満悦しているので、世に來臨することを御子に対して切望した。

その結果、御子が来臨した」という意味になる。これは、「喜悦から願望へ」に当たる。これは、二(二)のキリストの変容の個所や二(四)のフィリピ二・一三解釈とも一致している。

さて、結局ここでは、願望と喜悦のどちらの意味で言われているのだろうか。まず、文脈上はどちらの意味も取り得る。内容的にも、どちらもクリュソストモスの聖書解釈と一致しているので、どちらか一方には決めがたい。しかも、この二つの意味は密接に関連するものだったので、むしろどちらか一方に絞らない方がよい。従って、この個所での元々の意味のいかんにかかわらず、クリュソストモスの著作全体の観点から見ると、両方共、彼のエウドキア理解を表すものと言える。

それでこの二つを繋げると、彼の神学的理解を次のようにまとめることができる。「御父は御子に満悦しているので、世に來臨することを御子に切望した。御子は、御父の願望を実現するために世に來臨した。その結果、御父が喜悅した」。以上のことから、クリュソストモスのエウドキア理解では、キリストの受肉に関して、人間を救済しようとする神の強い意志だけではなく、その原因と結果として神の喜びという感情も意味されていた、と言える。

結び

聖書で神の感情を表す重要な一面であるエウドキアは、その影響作用史上でアンティオキア学派のキリスト論の最も大きな問題の一つにも関わっている。その重要性にもかかわらず、この聖書の語彙「エウドキア」の意味とアンティオキア学派のそれとの接点の研究は、従来行われていなかった。そこで、本研究はこの問題を明らかにするために、

クリュソストモスのエウドキア理解を考察した。

その結果、まず聖書解釈上の成果としては、「エウドキア」の語義は動詞か名詞かを問わず二つに大別でき、一つは「切望」という強い願望で、もう一つは「満悦」という強い喜びだ、ということである。しかも、この二つの語義は相互に密接に関連しており、ともすれば別々の意味として解釈しがちな現代の聖書解釈に対して、エウドキアの統一的理解という、ギリシア人ならではの、もう一つの可能性を提示している。次に、アンティオキア学派のキリスト論との接点としては、御父が御子に満悦したが故に、御子の受肉を強く望んだ、というエウドキアの神学的理解が挙げられる。この原因としてのエウドキアという点では、モプスエステシアのテオドロスと軌を一にしているが、他のアンティオキア学派の思想家との関係、更にアンティオキア学派以前の思想からの影響については、今後の課題として残された。最後に、神の感情の問題としては、クリュソストモスにおいては御子の受肉の原因と結果という重要な点で、神の喜びという感情が考えられていることが明らかにになった。

註

- (1) 著者 Ingvild Seald Gilhus, *Laughing Gods, Weeping Virgins: Laughter in the History of Religion*, London, New York: Routledge, 1997, 137 参照。
- (2) 学派ごとのキリスト論の概観としては、Theresia Hainthaler, "Die "antiochenische Schule" und theologische Schulen im Bereich des antiochenischen Patriarchats", in: Alois Grillmeier/al., *Jesus der Christus im*
- (3) *Glauben der Kirche, 2/3: Die Kirchen von Jerusalem und Antiochien nach 451 bis 600*, Theresia Hainthaler (ed.), Freiburg: Herder, 2002, [227-261], 227-245 参照。
- (4) このアンティオキア学派における「神の喜び」という研究テーマは、水垣渉先生の示唆によって初めて着想し得たものでもある。
- (5) 例えば「一般向けのものだが、宮田光雄『キリスト教と笑』(東京(岩波書店)一九九二年)また、高柳俊一編『聖

- 神に於ける愛は「東洋(オリエント)の神々」の Gilhus, *Langling Gods, Weeping Virgins* 参照。
- (5) Frederick G. McLeod, *The Image of God in the Antiochene Tradition*, Washington D.C.: The Catholic University of America Press, 1999.
- (6) *Id.*, 158-161.
- (7) Frederick G. McLeod, *The Roles of Christ's Humanity in Salvation: Insights from Theodore of Mopsuestia*, Washington D.C.: The Catholic University of America Press, 2005, 176-204.
- (8) 原正雄 'Rowan A. Greer, *The Captain of Our Salvation: A Study in the Patristic Exegesis of Hebrews*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1973, 217-220 参照。わが国では、画期的な近著『水垣渉・小高毅編『キリスト論論争史』(東京日本キリスト教団出版局)』二〇〇三年が無論、テオドロスも比較的詳細に取り上げてはいるが、通史である性格上、この「神の喜び」については彼のテオドロスの説明の中で「好意」と一度記されてはいるが、詳しく論じているのはならぬ(回書「一四三頁」)。
- (9) 例えばボヴォンは「ユダヤキア」を感情の表現ではなく、神の意志による行為、ユダヤキア(C. H. Dodd)のパウロ的な解釈に対して、それを愛情に満ちた神人関係と捉え、神の感情を重視するルカ的な側面を打ち出している。

クリュソストモスのエウロキア(神の喜び)理解(武藤)

- (François Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, (EKK, 3, 1), 1989, 129)°
- (10) わが国では、ロンバートの訳註(Wolfgang Trilling, *Der zweite Brief an die Thessalonicher*, (EKK, 14), 1980, 63)の「*εὐδοκίαν*」の語明を参照してはいるが、これは彼自身の訳(1*bid.*, n. 216)を参照するだけ、一旦瞭然とせよ。
- (11) G. Schrenk, “*εὐδοκία, εὐδοκία*”, in: Gerhard Kittel (ed.), *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, 2, Stuttgart: W. Kohlhammer, 1935, 736-748 参照。
- (12) EKK = Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament, Zürich: Benzinger/Neukirchen-Vluyn: Neukirchener.
- (13) 影響作用史的聖書解釈については、次の最新でよく知られたルツによる説明を参照。ウルリッヒ・ルツ、関西学院大学神学部訳『マタイのイエス——山上の説教から受難物語へ——』(東京日本キリスト教団出版局)』二〇〇五年、二〇—一九〇頁。また、Ulrich Lutz, “*Wirkungsgeschichte/Rezeptionsgeschichte*, III. 2: Neutestamentliche Wissenschaft”, in: Hans Dieter Betz/al. (ed.), *Religion in Geschichte und Gegenwart*, 8, Tübingen: Mohr Siebeck, 2005, [1596-1606], 1600sq. を参照。
- (14) 彼の生涯と著作について詳しくは、拙著『聖書解釈としての詩歌と修辭——シリア教父エフライムとギリシア教

- 父クリュソストモス』東京（教文館）二〇〇四年、一三二—一三三頁参照。
- (15) そのディオドロスの師であるエメサのエウセビオスも重要だが、彼の著作も同様に特にギリシア語原典ではわずかに残っていない。エウセビオスに関して詳しくは、最新『拙論』Shinichi Muto, “The Hermeneutics of Eusebius of Emesa in Comparison with That of Ephrem of Nisibis”, *The Harp* 18 (2005) 203-215 参照。
- (19) 代表的なものは Melvin E. Lawrenz, III, *The Christology of John Chrysostom*, Lewiston/Queenston/Lampeter: Mellen University Press, 1996; Sergio Zincone, *Studi sulla visione dell'uomo in ambito Antiocheno (Diodoro, Crisostomo, Teodoro, Teodoro)*, L'Aquila: Japadre Editore, 1988 を挙げたい。
- (17) 代表的なものは Margaret M. Mitchell, *The Heavenly Trumpet: John Chrysostom and the Art of Pauline Interpretation*, Tübingen: Mohr Siebeck, 2000 をあげ。
- (18) 例えば、最近の拙論「宗教生活から生活宗教へ——四世紀シリア・キリスト教の転換——」『宗教学研究』第三十七号、二〇〇三年、五三—七四頁参照。
- (21) Blake Leyerle, *Theatrical Shows and Ascetic Lives: John Chrysostom's Attack against Spiritual Marriage*, Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press, 2001. 特に *Id.*, 110-121 参照。
- (20) この傾向は、クリュソストモス自身の講解文書の傾向と相当程度一致している。七十人訳で「エウドキア」が多用されているのはシラ書と並んで詩編だが、彼が残した旧約の講解文書で主要なものが、「創世記講話」と並んで「詩編講解」だからである。また、新約の講解文書の場合でも、福音書は「マタイ伝講話」と「ヨハネ伝講話」だけがパウロ書簡はインライ書も含めて、当時パウロのものである。ただし、もちろん全ての引用がその聖書テキストの講解の際に引用されたもの、というわけではない。例えば、「詩編講解」の際にパウロ書簡も引用している。逆の場合もある。
- (21) 逆に、講解中のクリュソストモスが聖書本文をパラフレーズする場合に、聖書の語用に引きずられて「エウドキア」を使用することも若干見られる。
- (22) ただ、これは新約解釈の場合が多く、旧約は引用するだけの傾向が強い。
- (23) クリュソストモスの聖書本文との関係に関しては、旧約に関してだけだが、次の二つの最新の見解を参照。Hagit Amirav, *Rhetoric and Tradition: John Chrysostom on Noah and the Flood*, Lovanii: Peeters, 2003, 63-76; Robert C. Hill, *Reading the Old Testament in Antioch*,

Leiden: Brill, 2005, 47-61.

- (24) *Homiliae in Ep. II. ad Corinthios* 10, 2 (PG 61, 469). 他に『ローター』五・二六の「好むこと」を「切望した」と解しては、(*Homiliae in Ep. ad Romanos* 30, 1 (PG 60, 661))。なお、本研究で使用したクリュノストモスの著作のテキストは、全七次に分けた。
- PG=J.P. Migne (ed.), *Patrologiae Cursus Completus. Series Graeca.*
- (25) *Ibid.*
- (26) 「願む」と「願う」は相当程度、相互互換的な表現で、名詞ではそれぞれ、願望の行為と願望の対象の両方を表し得る。本研究では便宜上、前者の場合を「感願」、「望む」、後者の場合は「願む」と訳し分けた。
- (27) この語は更に意味だけではないが、「欲望」と訳した方が、かわいらしいが、悪い意味でも使われる。七十人訳の詩一四〇・五解釈 (*Expositiones in Psalmos* 140, 8 (PG 55, 440)) 参照。
- (28) *Homiliae in Ep. ad Romanos* 17, 1 (PG 60, 563).
- (29) *Homiliae in Ep. ad Ephesios* 1, 2 (PG 62, 13).
- (30) *Ibid.*
- (31) *Ibid.*
- (32) *Ibid.*
- (33) *Homiliae in Ep. ad Ephesios* 1, 4 (PG 62, 15).

クリュノストモスのエウロギヤ (神の喜び) 理解 (武藤)

- (34) クリュノストモスの題書本文では、「好むこと(εὐδοκία)」は属格 (*εὐδοκίας*) でなく、主格 (*εὐδοκία*) となっていた。従ってこの一節は、現在の校訂版テキストのうちに神・地(人間)の二分割ではなく、神・地・人間の三分割で解釈された。このテキストの問題をいつまで詳細には Schrenk, “*εὐδοκία, εὐδοκία*”, 745-747 参照。
- (35) *Homiliae in Ep. ad Colossenses* 3, 4 (PG 62, 321sq.).
- (36) *Homiliae in Mathaeum* 56, 3 (PG 58, 553).
- (37) *Homiliae in Ep. ad Hebraeos* 33, 4 (PG 63, 230).
- (38) *Homiliae in Ep. II. ad Thessalonicenses* 3, 1 (PG 62, 481).
- (39) *Homiliae in Ep. ad Ephesios* 1, 2 (PG 62, 13).
- (40) *Expositiones in Psalmos* 144, 5 (PG 55, 471).
- (41) *Ibid.*
- (42) *Homiliae in Ep. II. ad Corinthios* 26, 3 (PG 61, 579).
- (43) *Homiliae in Mathaeum* 38, 1 (PG 57, 429).
- (44) *Homiliae in Ep. ad Ephesios* 1, 2 (PG 62, 13).
- (45) この節、特に「働かざる神」と関しては、水垣徳『宗教探求の問題——古代キリスト教思想序説——』東京(創文社)一九八四年、三三二—三三九頁参照。
- (46) *Homiliae in Ep. ad Philippienses* 8, 2 (PG 62, 240).
- (47) *Contra Aномoicos* 9, 3 (PG 48, 784).
- (48) 御子の喜ばし御子のよきとの関連をいって、ローター

○・一編訳 (*Homiliae in Ep. ad Romanos* 17, 1 (PG 60, 563)) 牧師部 25.18°